

横堀ふみ

NPO 法人 DANCE BOX プログラム・ディレクター

トヨタ コレオグラフィーアワード2014・選評

振子びじん「no title」は、“舞踏”と“ストリートダンス”における身体の操作法や状態を相対化させ、混成させる試みをその過程で開示した。ストリートダンスと、または YANCHI の身体と出会うことで、振子自身の身体は愉しみ正に躍っていて、また、身体のなかに異なる状態をもった、例えば動静や温度といった、様々な質感を同居させた。振子のダンサーとしての魅力を十分に引き出していたと思う。ただ、アジアで活動する現代の振付家達の仕事、例えば、パプア地方の民族舞踊とストリートダンスを融合させ独自の身体技法“アニマル・ポップ”を生み出したジェコ・シオンポ（ジャカルタ在住）等の数々の舞台作品に出会ってきた私にとって、今回の振子の試行は、未知数の可能性を大きく含んだ始まりの地点であったと思う。

スズキ拓朗「〒〒〒〒〒〒〒」には、ダンスという表現形態、もしくは身体を通じた表現でないと成立しなかったのだろうかという問いが浮かび上がって来た。例えば、言葉を連歌のようにリレーさせながら、群舞を構築していくシーンが多く、印象的であったが、言葉がアンサンブルをリードするのではなく、ムーブメントが展開させていく試みがあってもよかったのではと思う。作り手の意図をぶれなく伝える為の小道具、音楽、言葉の選択はクリアだった。ただ各々の要素が強かっただけに、もっとそれらを踊らせて欲しかったとも思う。

木村玲奈「どこかで生まれて、どこかで暮らす。」は、ある身体の状態を現前させる為の仕掛けをつくること（＝振付ける）において、彼女自身なりの方法を編み出すことを実践した。それは、踊りを生み出す理由から振付を考える過程をもち、方言と身体の関係性を問いながら、ダンサーの身体に内在する様々な感覚や記憶に揺さぶりをかけ、上演では豊穡なダンスが生まれていたと思う。ただ、彼女の今回の振付のアプローチは、観客にまで届くような開き方をもち、強度を得ていただろうか。今作品は、木村の初めての振付作品である。今後、より制作を重ねながら、自身の方法をさらに構築して行って欲しい。

塚原悠也「訓練されていない素人のための振付けのコンセプト 001／重さと動きについての習作」は、“振付”のコンセプト／方法論は明確で、また方法論に対してのパフォーマンスは十分に成立していた。加えて、振り付ける人と振り付けられる人の権力関係を確信犯的に提示し、パフォーマンスは、観客の身体へも感覚的に迫り“振付”が介入していくような時間であった。た

だ、構成の展開という面においてある程度先が読めてしまうこと、さらに言えば、“振付”のコンセプトを越えて、パフォーマンスから立ち上がってくるものがより強くあればと思った。

川村美紀子「インナーマミー」においては、川村美紀子の“振付”は、川村美紀子の身体であってこそ成立する、それは、出演した川村以外のダンサーの身体を見て思ったことだ。彼女自身の身体を通して開発された振付言語の独自性や特異性は川村のソロの場合に遺憾なく発揮されるのではないかと、つまり、それらを体現する剛柔兼ね揃えた強度のある身体性と、振付という枷を越えてしまえる“やんちゃ”さに、彼女の“振付”の魅力が見えてくるのではないかと思った。今回上演された作品では、群舞になることによって既視感のあるオーソドックスなムーブメントの展開を見せたように思う。また、小道具や音、照明の使い方が、今回の上演の段階では、作品のコンセプトとまだ総合されていなかった。次回作に期待している。

乗松薫「膜」においても、ダンスという表現形態、もしくは身体を通じた表現でないと成立しなかったのだろうかという問いが浮かび上がって来た。身体の生理的な感覚をつくような行為が盛り込まれるといったような工夫は所々に施されていたが、各々のシーンの必然性がダンスという表現形態を通して説得し切れていなかった、つまり、作品の世界観やイメージを、言葉で説明するかのように、身体が解説することになってしまっていたと思う。

2014/09/11